

〔エッセイ〕

限界状況について

橋 本 富 清

ヤスパーズは、対象的なものとなる現象としての自己存在を「現存在」、自己の根源については「実存」として区別し、〈現存在としての私〉が、ある状況のなかで、状況内存在として「実存」へと飛躍するとき、「可能の実存」としての佇まいをみせるという。このとき、現存在としての私を、実存へと飛躍させる契機となるものが、ヤスパーズが示す「限界状況 (Grenzsituation)」であって、限界状況における経験は、貴重な示唆を私たちに与えている。

私が限界状況を知ったのは、2000年の父の死に直面して、死を受容する経験を得たことによる。人間は万能ではなく、いつかは寿命を終える存在であって、病気になることや死を迎えることは、人にとって避けることはできないものである。しかし、病気になった時点で、生きながらにして存在は沈黙させられてしまう。死を受容する過程で、病気が本人の過失ではなかったとしても、社会的には死とみなされる現実、いかに健康であることや、命が続くことが行為の前提とされているのかを知ることとなった。

生と死の淵に立たされた父の慟哭の叫びは、魂に残響する。そして、死を迎えたのち、深夜に訪れる静寂から我に返ったとき、ふと、死の事実を思い知らされ、言いようのない虚脱感に襲われて、その虚しさを振り払うために、生前の札状と称して、原稿用紙で何十枚も父への手紙を書いてみたりしたが、心を落ち着かせることはできなかった。この時期、いろいろな書物を手にしてみたが、そのなかで、ヤスパーズの『哲学入門』との出会いは、慰めとなって、私の魂に舞い降りてきたのであった。

『哲学入門』を機縁とした私のヤスパース思想への旅路は、まだ、始まったばかりである。だが、限界状況という状況に己を埋没させた時間は、ヤスパースの唱える限界状況を、問題意識として私のなかに芽生えさせることとなった。なぜ、ヤスパースは、限界状況を自身の哲学上の課題として取りあげたのだろうか。例えば、日常的な言明に戻ったとき、私たちにとって、限界状況という状況がいつか訪れるものと想像するとしたら、限界状況という概念は、色褪せていくように思えるからである。ヤスパースが、限界状況について考察を試みた理由とは何であったのだろうか。以下に、ヤスパースの著書を紐解いてみたいと思う。

1919年に発表された『世界観の心理学』において、限界状況が登場するが、そこには、ヤスパース思想を知るうえでの興味深い記述がみられる。『世界観の心理学』下巻の「第三章 精神の生」において、「二 諸々の限界状況」の叙述に取りかかる前に、「一 諸々の評価と価値表」で、価値について触れながら、最高善の問題を取りあげている。価値破壊と価値の生成の抑制は、あらゆる個別的状況によって経験されるものであるが、ヤスパースは、この現象を超えて、「決定的、本質的な状況」を指し示す。この「決定的、本質的な状況」は、「人間それ自体と結びつき、有限な現存在と共に必然的に存在」し、「主観－客観－分裂」において、「どこでも感じられ、経験され、思惟される状況」のことであって、ヤスパースによって、限界状況と名付けられることになった。

また、限界状況が生じる要件として、『現代の精神的状況』においては、「国家や精神および人間存在そのもの」が描き出され、大衆社会の成立や技術的な集団秩序のなかで、諸々の現存在が限界を感じて抱く不安によって、〈人間であること〉、〈人間は何になりうるのか〉といった問いかけがはじまると述べられている。ここにいたって、ヤスパースの限界状況は、「主観－客観－分裂」といった静的な分析から、「無の空虚のうちで自由である」という動的な分析へと置き換えられることになり、「人間は自分自身を通じてしか超越者に達しえない」という真理に到達するのである。

さて、『世界観の心理学』において見い出された限界状況であったが、ヤスパース思想を考察する場合に忘れてならないのが、ヤスパース思想の特徴であろう。言うまでもないことだが、ヤスパースは、精神病理学という医学の立場から思惟の歩みを始めたため、ヤスパース思想は、極めて、科学的な手法を取っている。そのため、現象を客観的に記述するという叙述の形式が随所にみられ、前掲した『世界観の心理学』においても、「二 諸々の限界状況」の叙述をする前に、「一 諸々の評価と価値表」を用意して、思惟に客観性を持たせようとしているように、ヤスパースの限界状況には、ヤスパースならではの意図をうかがうことができる。

このことから、ヤスパース批判としてよく聞かれる、全体性に欠け、抽象的であるという指摘は、ヤスパース思想のある側面についての解釈の仕方であると思えるが、ヤスパース思想を正しく理解していない。ヤスパースが、精神病理学という医学の立場から思惟の歩みを始めたことによって、主訴を聞いて、現象を正確に記述するという医療現場の手法を取り入れていることを、ヤスパース思想のひとつの要素として顧みるべきであろう。状況を重んじるヤスパース思想には、人間の観察に優れ、状況を客観的に分析しようとする叙述がみられるが、このことから、「状況内存在」として、現象は主観的でもあり客観的でもあるために、全体性という括りを拒否せざるを得ないヤスパースの主張が明らかになってくると考えられるのである。

これまで、ヤスパースの限界状況について述べてきたが、私が、ヤスパースの『哲学入門』を読むことによって死を受容したように、ヤスパース思想には、実存への歩みを伴った、不思議な沈静さが隠されていることを否定することはできないであろう。

なぜなら、先に挙げたように、ヤスパースの状況への視点の取りかたによって、次のことが立ち現れてくるからである。すなわち、現存在秩序の破綻によって、〈現存在としての私〉は、「主観－客観－分裂」の状態となってしまう、「無の空虚のうちで自由」となるので、「人間は自分自身を通じてしか超越者に

達しえない」という真理の存在である。ここで、状況について、ヤスパーズの次のような一節があるので、引用してみたい。「ある状況を目にとめることは、その状況の主人となる初めであり、状況を眼中にとらえることは、もうすでにひとつの存在を闘い取ろうとする意志である。私が現代の精神的状況を探求するとき、私は一個の人間であろうとしている」とは、『現代の精神的状況』における叙述である。

そして、このような状況への視点を基にして、ヤスパーズの限界状況は、「私の現存在が実存であるのではなく、人間は現存在において可能的実存である」とする、実存への考察へと繋がれていく。ヤスパーズによれば、「可能的実存」は、「世界と実存は緊張のうちにある」ことを前提としているのであるが、〈現存在としての私〉は、限界状況を抜け出るときに、「一気に、ひと跳びに、急激に」飛躍を行ない、このとき、実存は、歴史的な代理不可能な仕方で、充実されるというのである。ここで、注目すべきこととしては、死の受容について、「実存は、他人の死を介して、超越者の中に住まうようになった」と述べられているように、ヤスパーズの限界状況が、「限界」という状況を通じて、内在的でありながらも、超越者の存在を意識している点であろう。

『哲学入門』でみられるように、限界状況を中心としたヤスパーズの語りは、私たちに、ある沈静さを与えている。父の死は、「死によって破壊されるものは、現象ではあっても、存在そのものではない」というヤスパーズの語りによって、私の中に実存として屹立することになったのである。

(ヤスパーズ協会会員)